

☆低侵襲手術（いわゆる MIS）について

我が国でも10年ほど前からMIS (Minimally Invasive Surgery) =最小侵襲手術という言葉が用いられるようになりました。しかし具体的に何をもちいて最小とするかの明確な定義は未だ存在しません。小さい皮膚切開から従来と同じ器具で手術を行う場合、視野が悪いぶん操作が難しくなり一番肝心な内部の処置がおろそかになる可能性も否定できません。このような理由から医師の中にもMISに批判的な意見が存在します。

しかし手術を受ける患者さんの立場からすると、同じ手術を受けるのであれば出来るだけ体の負担が少ない方が良く考えるのは自然なことであり、我々はその希望に応えたいと考えます。

従来より低侵襲な「体に優しい手術」を目指していますが、皮膚切開の大きさだけに拘るのではなく、内部組織（骨、筋肉、靭帯、腱など）の損傷が小さいことがより重要と考えています。また手術を行う際には、小さい皮膚切開から内部の操作が可能となるよう開発された専用の手術機器を適切に用いることで、安全・確実に手術を行うよう心がけています。

☆手術後の痛みや吐き気について

低侵襲に対するこだわりは手術だけではありません。手術後の苦痛もなるべく少なくなるよう努力しています。手術は体にとっては怪我と同じであり、直後には生体反応としての「痛み」が出ることは避けられません。しかし低侵襲手術では、小さな皮膚切開や、内部の組織損傷を少なくすることで従来法より痛みが少ないことが多数報告されています。

手術後の痛みに対しては、麻酔から醒める前に鎮痛剤を予め使用する「先取り鎮痛」や、手術内容によっては痛みの程度に合わせて調節可能な鎮痛剤の持続点滴投与などで対処しています。痛みがあればどうぞ我慢せず、仰ってください。

また、全身麻酔・手術後に起こり得る「吐き気」も不快なものです。これに対して制吐剤を術中に予防的投与を行っています。

☆手術後の創処置について

手術後の創消毒やガーゼ交換などの創傷管理に関しても新しい考え方を導入しています。近年の研究では清潔手術の場合、術後に創消毒の必要性は少ないこと、創の治癒には湿潤環境の方が好ましいことが分かってきました。以前はガーゼ交換と創部の消毒を毎日のように行っていたいますが、現在は防水性で内部を湿潤環境に保つ術後専用の被覆材を貼り創部の消毒はほとんどしていません。結果的に創消毒の苦痛もありませんし、シャワーも可能になりました。手術内容によりドレーン（内部に血が溜まらないよう留置する管）を留置した場合は、抜去した後に被覆材を貼付します。ただし感染や創状態不良などの特殊な場合はこの限りではありません。

また、手術創は吸収性の糸で真皮埋没縫合し表皮はテープ固定としています。ホッチキスとよばれるスキンステープラーを使用する場合に比べ、より丁寧に縫合しますので手術時間は余分にかかりますが、切開部以外の皮膚表面の縫合跡も残りませんし、抜糸の苦痛がありません。